

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	蟻：随想
Author(s)	江口， 渙
Citation	龍南， 2 3 8： 1 2 3 - 1 2 4
Issue date	1937-10-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7428
Right	

蟻

江　　口　　渙

その頃、まだ十二才の少年にすぎなかつた私は、ある日、隣の小父さんにつれられて釣竿を肩にしながら、村はづれの野道を歩いてゐた。

ひどい暑さだつた。汗を拭き拭き小父さんの後について行つた私は、不圖、不思議なものを畑の上に見出した。女の帯ぐらゐな幅で黒いものが一本、畑から向ふの林へうねうねと續いてゐるのだ。

「やあ。たいした蟻だ。蟻の引越しだ。」

小父さんは、一寸私を振り返ると、又更めて黒く續いた素晴らしい蟻の大群の行列を見詰めた。

「小父ちゃん。あの蟻、何處へお引越しするの。僕いつしよに行つてみたいな」

「うん。さうだ。一つ、行つて見ようか」

氣輕に答へた小父さんは、私を後に従へながら、野菜畑の上をすたすた歩き出した。そして一と足一と足と蟻の行列を追ひ越して行つた。

黒い列は間もなく林へ入つた。林から更に土の乾いた草原へぬけた。そして草原の向ふ側の小さな流へぶつかつてそこでしきりにうろうろしてゐる。

流は幅二尺足らずで、水がちよろちよろ流れてゐる。蟻の列は向ふ側へ渡る場所を懸命に探し求めてゐるらしい。流に添つて百メートルほど草を眞黒に染めながら、無闇に往つたり來たりしてゐる。

中で勇敢なのがどしどし水へ飛び込んでゆく。だが、直ぐに次から次へと押し流されては見えなくなる。たゞ、運の好

い者だけが、やうやくもとの岸へ歸りついて、あはれに濡れながら這ひ上る。それでも後から後からと又飛び込む。浅い水は胡麻をまいたやうに蟻を浮べて、ゆるやかに動いてゆく。

やがて大きいのが一匹、流されながらも、ぐんぐん向ふへ出て行つた。そして、向ふ岸から垂れ下つてゐる草の葉先へ、どうやらうまく泳ぎ着いた。だが一向這ひ上らうとはしないで、そのまゝ葉先にしがみついて軀を靜かに水に浮かせた。

更に一匹、又一匹。同じ葉先へ泳ぎつく蟻がだんだん殖えていつた。だが、どれも矢張這ひ上らないで、前の蟻の軀にしがみついては泳いでゐる。二匹、三匹、四匹、五匹。蟻の紐が見る見る細長く伸びて行つた。たうとう紐の端がこちらの岸の草に届いた。岸にゐた蟻が紐の上を渡り出した。紐が二本になり三本になり、間もなく蟻の細長い船橋がゆるい流の上にかゝつた。と、思ふうちに、橋の上を蟻の大群がどしどしと渡つて行つた。大群は橋になつてゐる蟻の上を踏み越え踏み越えては渡る。時々、橋がゆるい弓なりに曲つては所々水に沈むと、後の蟻が直ぐ様軀を水に浮べて自分も橋の一部となる。そして、更に次の大群を渡すのである。

何萬とも知れない大群が流を渡り終つたのは、凡そ二十分の後だつた。だが、すっかり渡つた後になつても、黒い橋はじつと動かずに矢張浮いたり沈んだりしてゐる。よく見ると橋になつた蟻は一匹残らず死んでゐるのだ。仲間を向ふ岸へ渡すために、自分は死んでも橋を崩さずにゐたのだ。

「人間だつてこの世の中を良くするために先に立つて働く場合、この蟻のように生命を捨て自分が橋にならなければならぬ事があるもんだよ。それが出来る人は、人間の中でも一番偉い人だ」

かう云つて私の顔をのぞいて見た小父さんの眼に涙が光つてゐた。